

7月に映画「プラン75」を観ました。国の事業で75歳になると希望者は生活費を頂き、お呼び出しがあると施設で薬殺され、火葬にされて、合同の墓に納められるという内容です。齢をとることは、痛いところや不自由なところを抱えて生きることが辛いだけの日々だと考え易いのですが、クリスマスの出来事は神様から大事な使命を与えられて生かされている日々だと語り掛けています。

ルカが記しているクリスマスの物語でも大事な働きをしているのは老人です。

ザカリアが祭司の仕事をしている時に主の天使が現れ、子どもが与えられると示されます。ザカリアは自分も妻も齢をとっており、「信じられない」と言うと、天使は「このことが実現するまであなたは口がきけなくなる」(20節)と言いました。齢をとって出来なくなったことが多いのに、さらに出来ていたことが出来なくなることによって神様の働きかけが証明されるということです。聖書では若い人が元気に良い仕事をすることも記していますが、大事な仕事はみんな齢をとった人が用いられてしています。アブラハムもモーセも齢をとってから御用のために生かされました。

赤瀬川源平著「老人力」は、物忘れがひどくなることは記憶力が衰えることではなく忘却力が強くなることだと書いています。老いを情けないことだと考えるのではなく、素晴らしいことだと書いて、これまではマイナスの評価しか受けてこなかったことに別のプラスの可能性を見つけようとしている本です。

「歳をとる＝出来ない」という定義を捨てて、出来なくなっても、出来なくなったからこそ出来ることがあると考えて、人間は神様に命を与えられている限りこの世界の大事な構成員で役割を担っているという定義を打ち立てて考えるとこの世界にクリスマスのような出来事、つまり神様がこの世界を救おうとする働きが具体化するのではないのでしょうか。例えば、段差があると登れない人は誰かの助けを必要としている人だとは考えず、バリアフリーの社会を創出するために大事な提案を身をもって訴えている人だとする。何度言ってもすぐ忘れてしまう物忘れの激しい人のことは、何の役にも立たない人だとは考えず、どんなに恥ずかしい罪を告白してもすぐ忘れてくれるカウンセラーのような人だとする。ちょっと発想を変えるだけで、共に生きてゆく社会を作り出すクリスマスの出来事が始まるのです。